

エッセイ 古本屋の仕事場十五

近世活字 もついで印刷

橋口 侯之介 (誠心堂書店)

§木活字の見本

今号の弊社古書目録に、木活字一式を載せている。
京都古典会の市場で出たもので、四つの収納函に合計一、八二〇字分の



木製活字が入っている。おそらく江戸時代末期から明治初期のものと思われる。これだけまとまって出ること稀なので頑張って入札した。

カナや約物やくもの(句読点など)の類はなかった。後で述べるように活字で本をつくるには、万単位の個数が必要と思われるので、二千弱ではまだ不十分な数と思われる。全てではないにしても実際に使用されたもので、かなりすり減っている。活字を拾うためには収納函に一定の並べ方があったと思われるが、本品に規則性を見出すことはできなかった。保存の途中で入れ直しされた可能性があり、天地左右がひっくり返っているものも多い。入手後はそのままにしておいたが、どのように活字を選んでいくのか、知りたいところだった。

活字一つの大きさは八ミリ四方で、高さ十六ミリのものが三函に収められたものと(函の寸法一六三×二九〇ミリ、上図)、六ミリ四方高さ十八ミリ(一函五八〇個入り、函寸法一七〇×三〇〇ミリ、右下図)とがあった。この二種は同時には組めないの



別のセットと思われる。

一般的に活字版は一行二十字詰めにして組むことが多いが、これだと八ミリ四方のもので版面の天地はせいぜい一六〇ミリ程度である。中本サイズにしかない。活字としては小さいほうだと思われる。

§ 近世に活字印刷が主流でなかったわけ

江戸時代初期には活字印刷本（古活字版）が出されたが、明治以降近代的な活版印刷が始まるまでの間、主流は木版による印刷本（せいはん整版）だった。

グーテンベルクの「活字印刷術発明」というヨーロッパの流れに惑わされて、つい、活字印刷が先進的で木版印刷は前近代的な遅れた技術だと思っっている人の多いことに、わたしはびっくりする。

日本の近世（中国や朝鮮でも）では逆だった。むしろ古活字版の出現は、整版のよさを再認識する出来事でもあった。

活字版には当時の技術では超えがたい欠点があった。大量部数に向かなかったのだ。一度組んだ活字は、一定の部数（多くは百部程度）だけ刷ったらばらしてしまうので増刷する必要があるときには、再び活字を組み直さなければならない。板木に文字を彫っていく方法に比べて最初のコストは安い、組み直しとなると経済性は逆転してしまう。工程の手間だけでなく、校正もやり直しである。近代の活版印刷では、紙型をつくることでその欠点を克服するが、江戸時代まではその術がなかった。

そのため、商業印刷が軌道に乗った十七世紀に木版による整版印刷がむ

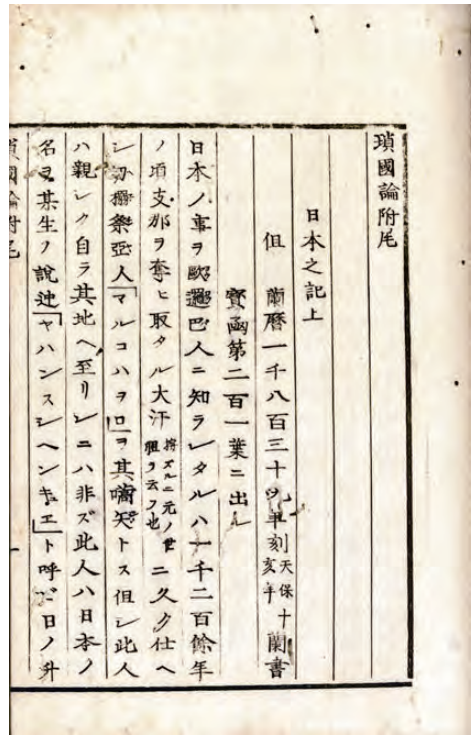


『手妻早伝授』から。大衆本のこのような手軽さを活字でつくるのは至難の業

訓点や振り仮名などの細かい印刷、割注のように異なった文字サイズの混入、挿絵など、活字では容易に実現できなかった技術が難なくこなせたことなどが理由である。むしろ精緻で高い生産性を確保できたのである。また、その板木を所有する（板株）ことで、著作権を確保することもできた。それが重板・類板問題（海賊版対策）の解決につながるなど都合よかったのだ。江戸時代後半になると、板株の売買、分割など複雑な出版形態になっていくが、いずれも板木が担保となっていたからこそである。

§ 近世後期の私家版活字印刷

逆に、部数より発刊の簡便性を採用する考えが一部にあつて、十八世紀の末頃から再び活字版が復活し、江戸時代末期にはかなり盛んになる。これを学術的には近世活字版と呼んでいる。木製活字だったので木活字版ともいう。ただし、それは本屋の町版でなく私家版である。進んだ技術として受け入れられたわけではなく、資金は十分でないが著作をぜひ出したい



木活字本の例『鎖国論附尾』(嘉永7年刊)

という場合の印刷方法だった。

多治比郁夫・中野三敏編による『近世活字版目録』(平成二年、青裳堂書店)では、およそ千七百版が確認されている(その後も新しい発見があり、全貌は未だにつかめないほどである)。

近世活字版のもうひとつの大きな利点には、奉行所の検閲がなかったこともある。幕府は、書物にそれなりに気を使ってきたが、中心は本屋による木版刊行物に対してであって、写本や百部程度しか刷らない活字版は影響力が少ないとみて目こぼしをした。そのためか、近世木活字版には、百部限定という表記が決まり文句で、その程度しかつくりませんと宣言している。それゆえに幕府も目くじらを立てなかつたのだ。

そこに見えるのは、それでも本を出したいという欲求が一般の著作層に

強かつたということだ。一定の収益が見込めないと刊行まで漕ぎつけられない町版では相手にされない著作物でも、活字を用い私家版で出すなら現実的な選択になりえた。それが多くの活字版の出た背景だろう。しかし、それでも決して容易ではなかつた。

木活字による自費出版の苦勞を伝える話として安芸国福山藩の太田全齋おわたぜんさいが作った『韓非子翼かんびしよくせい』という本のことがある。翼よくせいというのは鳥の腹毛をいい、「翼よくせい」で翼を広げて集めて腹の毛で暖めるという意味らしい。韓非子に関する古くからの注釈を幅広く集めて、便宜に供する本ということだ。この本の末尾に刊語かんごがあつて要約すると、こう書かれている。

「せつかくある人から木活字二万余個をわけてもらったのに、貧しいうえ妻が患い、小さい子を抱えていたため仕事は遅々として進まなかつた。子供たちが漸ようやく長じ皆父業ふぎょうに服し、兄弟三人びんべん暇ひんべん勉事べんべんに従い、翁は蚤はやく起き、兄は晏おそく寝、今茲こゝに戊辰ぼしん(文化五年)孟夏もうかすなわ乃ち業をおえた。太田方ほう擺ひらく、男周彫しゅう彫しんすける、男信助彫しんすけ彫しんすける、男三平刷さんぺいる」

とあり、本人が版を組み、長男次男が足りない活字を彫り、三男が刷るという一家による涙ぐましい努力をあししかけ八年して、全十一冊を完成させたのだつた。部数はたつた二十部であつたという(現存する部数から推して、もう少し多いと思われる)。明治になつて富山房ふざんぼうが出した『漢文大系』におさめられて高い評価を得たので、後世その努力が報われた点が救いである。本を出すということは、大変だつた。今回の活字セットにもそれなりの労苦がしみこんでいるに違いない。